2025 年 10 月 19 日　　西村隆星

主題「涙の先にあるもの」

ヨハネの福音書 11:17-27

序　死といのち

本日は、召天者記念礼拝にお越しいただき、ありがとうございます。今日は、聖書から先に召天した兄弟姉妹たちが希望にしていた「いのち」とは何かを共に見ていきたいと願っています。地上での信仰の歩みを走り終えた兄弟姉妹たちが信じてきたこと、同時にいま生かされている私たちが信じていること、そしてまだ信仰を持っておられない方に向けて語られている招きの言葉でもあります。今日はそんな御言葉を共に分かち合っていけたらと願っています。

さて、私たちはこの召天者のことを覚える時に、「いのち」について問われるかと思います。この地上での歩みが長ければ長いほど、「死といのち」の問題は自分の問題として大きく、大きくなっていきます。近しい人の死の悲しみはあまりにも大きく、そこにもたらされる喪失感は、あまりにも大きい。そんな暗闇の中で、確かに輝き続けるものがある。それは、永遠のいのちの希望。イエス・キリストにあって、もう一度会える希望。自分が主のもとに帰る時、出会える約束がある。今日はその約束について共に見ていきたいと願います。

１．ラザロの死

今日出てくるラザロという人物。彼は、イエスの友人でした。そんな彼が病にかかった。そして死にそうだった。しかし、イエスはその知らせを聞き、このように語られた。

> ***この病気は死で終わるものではなく、神の栄光のためのものです。それによって神の子が栄光を受けることになります。***

そしてなぜかそこから二日その場にとどまったんです。その後、イエスは「もう一度ユダヤに行こう」と言われた。実はこのちょっと前にイエスはユダヤで殺されそうになっているんです。石で打たれ、殺されそうになった。普通ならもう戻りたくないそんな場所。しかし、イエスはもう一度ユダヤに戻ると言われた。そしてイエスがラザロの家に着くと、すでにラザロは死んでしまっていて、墓に入れられてから 4 日間経っていた。それが今日の箇所までのあらすじ。ラザロが亡くなった知らせを聞きつけた人たちが大勢、姉であるマルタとマリアのところに集まっていた。そしてマルタはイエスが来られたことを聞いてイエスを出迎えに行った。そして言ったんです。

主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかったでしょうに。しかし、あなたが神にお求めになることは何でも、神があなたにお与えになることを、私は今でも知っています。

心からの叫び。「私は知っているんです。あなたがいてさえしてくれれば弟は、ラザロは助かったんだって。だって、あなたが神様にお求めになったことは何でも与えられることを私は知っているから。私は信じているから。だからこそ、どうして、どうしていてくれなかったんですか。」

そんな彼女の悲痛な叫びがここにある。この彼女のことばは私たちと重なり合ってくる。悲しみに暮れる時、涙で光が見えなくなる時、死を目の前にする時、主よ、どうしていてくれなかったんですか、と私の心が叫ぶ。しかし、この叫びを聞いたイエスは言われた。

あなたの兄弟はよみがえります。

何を言っているのか、と思ったかもしれない。しかし、マルタは答えます。

終わりの日のよみがえりの時に、私の兄弟がよみがえることは知っています。

天で会えることは知っている、とマルタは答えた。その答えにイエスは言われた。

「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことがありません。あなたは、このことを信じますか。」彼女はイエスに言った。「はい、主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストであると信じております。」

その後マルタはマリアを呼んだ。しかし、マリアもまたイエスに言ったんです。

主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかったでしょうに。

２．イエスの涙

イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのをご覧になった。そして、霊に憤りを覚え、心を騒がせて、「彼をどこに置きましたか」と言われた。彼らはイエスに「主よ、来てご覧ください」と言った。イエスは涙を流された。

イエスは死がもたらす現実の中で、霊に憤りを覚えられた。心が騒がれた。そして、涙を流された。その後、墓の前に出て行かれて祈られた。

> *父よ、わたしの願いを聞いてくださったことを感謝します。あなたはいつでもわたしの願いを聞いてくださると、わたしは知っておりましたが、周りにいる人たちのために、こう申し上げました。あなたがわたしを遣わされたことを、彼らが信じるようになるために。そう言ってから、イエスは大声で叫ばれた。「ラザロよ、出て来なさい。」*

すると、死んでいたラザロが包帯でぐるぐる巻きになったまま出てきたんです。そしてこの出来事を見たユダヤ人の多くがイエスのことを信じた。

結論　わたしはよみがえりです。いのちです。

このラザロのよみがえりから分かること。それは、私たちの主であるイエスは私たちの悲しみを誰よりもよく知っていてくださるお方だということ。愛する者を失ったときに共に涙を流してくださるお方。罪がもたらす悲しみを見て、死を見て、共に涙を流してくださる。そして悲しみの最中にある私に語ってくださる。

> *「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことがありません。あなたは、このことを信じますか。」*

イエスはまっすぐ、マルタに問いかけられた。そしてこの問いを私たちにも問うてくださる。イエスは自分が石打ちで殺されそうになっても、このことを伝えるために、神の栄光があらわされるために、「あなたがわたしを遣わされたことを、彼らが信じるようになるために」またユダヤに帰ってこられた。そして二日とどまられた理由。それも同じ。

> *この病気は死で終わるものではなく、神の栄光のためのものです。それによって神の子が栄光を受けることになります。*

神の栄光のため。それはイエスがよみがえりであり、いのちであることがあらわされるため。イエスを信じる者が死んでも生きることを、生きていてイエスを信じる者がみな、永遠に決して死ぬことがないことを、ラザロのよみがえりを通して示された。

ここに希望があるのだ、と。これが良い知らせ、福音なんだと、イエスはこの愛する友人の死の中でも教えてくださった。

しかし、愛する者との別れは本当に寂しい。悲しみが押し寄せてくる。マルタのように、マリアのように、「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかったでしょうに」と何度も心が叫ぶ。しかし、この叫びに、涙に、イエスは共にいてくださる。この悲しみを知っていてくださる。そして共にいてくださるだけではなく、涙の先にある希望を教えてくれる。

> *「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことがありません。」*

この希望は失望に終わることはない。悲しみは残ります。喪失感はいつだって拭いきれない。しかし、この希望の約束は、いつだって変わらずに輝き続けている。そしてこの希望を天に送った愛する兄弟姉妹も握りしめていた。死を前にして、病気の苦しみや、別れへの恐れや悲しみがあったはずです。自分の人生に納得して、満足して、もう十分です、と天に帰られた人はそれほど多くないと思うのです。きっと私たちの人生の最後の多くは、「中断された人生」に見える。しかし、そんな人生の中で、私の主はよみがえりであること、いのちであることを私たちは「信仰によって」知ることができる。地上の歩みを終え、約束どおりに、イエスにお会いしたときに、イエスと共に私の愛する者たちともう一度会える希望がある。先に送った、愛する兄弟姉妹もまた、そのような恵みの中に今この時も居られることに、私たちは深く慰められます。だからこそ、私たちはイエスの問いに応えていきたいんです。

> *「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことがありません。あなたは、このことを信じますか。」*

私たちはこのいのちのゆるされる限り、主のよみがえりといのちの希望を胸に共に歩んでいきましょう。